



第 22 回 男女共同参画学協会連絡会シンポジウムに参加して
シンポジウムテーマ～研究者・技術者にとっての選択的夫婦別姓制度～ 1

記事

I. 次々期会長候補及び次期代議員選挙結果.....	4
II. 学会各賞受賞者決定.....	4
III. 書評依頼図書（2025年5月～2026年1月）.....	5
IV. 寄贈図書.....	5
V. 地区会報告.....	5
書評.....	17
京都大学生態学研究センターニュース.....	20

第 22 回 男女共同参画学協会連絡会シンポジウムに参加して シンポジウムテーマ～研究者・技術者にとっての選択的夫婦別姓制度～ 曾我昌史、河内香織、池本美都、三宅恵子、可知直毅、 荒木希和子（キャリア支援専門委員会）

2025 年 10 月 11 日(土)、第 23 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム「～研究者・技術者にとっての選択的夫婦別姓制度～」が日本大学生物資源科学部湘南キャンパス 大講義およびオンライン(ZoomWebinar)にて開催された。日本生態学会は正式加盟学会として 2007 年度から本シンポジウムに毎年参加している。日本生態学会からは、キャリア支援専門委員会から三宅・可知(対面)、荒木・池本・河内・曾我(オンライン)が参加した。

午前は、日本森林学会会長・正木隆氏による開会挨拶に始まり、第 23 期の連絡会活動報告およびワーキンググループ活動報告、さらに選択的夫婦別姓に関するアンケート結果報告が行われた。11 時からはポスターセッションが実施され、25 の学協会、3 つの連絡会ワーキンググループ、1 大学の計 29 件のポスターが展示され、活発な情報交換が行われた。日本生態学会もポスター発表を行い、これまでの男女共同参画に関連した取り組みを紹介した(写真 1)。発表の際には、積極的にいろいろな活動に取り組んでいるといった意見や感想が寄せられ、特に本学会が実施しているファミリーリース室の取組や委員の公募制に対して、他の学協会から高い関心が寄せられた。

午後の基調講演では、夫婦別姓訴訟弁護団の榊原富士子弁護士が「選択的夫婦別姓制度の実現に向けて—歴史と論点—」と題して講演した。夫婦別姓をめぐる議論は戦後間もない 1946 年から始まっていること、そして議論の変遷について分かりやすく解説された。2024~2025 年にかけての世論調査(二択形式)では、選択的夫婦別姓に「若年層の約 8 割」「全体の 6~7 割」が賛成していることが示された。一方、通称拡大を含む三択形式(内閣府、読売、産経・FNN、NHK など)では、中庸にも見える「通称」が選ばれやすいが、この形式には二つの異なる問題を混在して問うという構造的な問題があると指摘された。

すなわち、①選択的夫婦別姓制度導入の賛否と②旧姓通称使用の拡大の賛否が混同されており、回答者の多くは①と②を相反するものとは捉えていない。また、旧姓の通称使用の実効性や法的実現可能性が説明されないまま選択肢に含まれている点も問題とされた。令和 3 年(2021 年)内閣府調査でも同様の問題が指摘されており、三択にするのであれば「選択制+通称拡大」を加えた四択が必要であるという見解が示された。さらに、制度改正の賛否を問う直前に「子どもへの悪影響」のみを質問し、良い影響を問わない現在の調査手順は、回答を反対方向に誘導する可能性があると指摘された。良い影響の例として、1) 事実婚の父母が法律婚を選びやすくなり、共同親権が得られる、2) 子が父母いずれの姓も承継できる、3) 別姓親子が「普通の存在」として受け入れられ、偏見が軽減されるなどが挙げられた。これらの観点は報告書では十分に取り上げられておらず、非常に示唆に富む説明であった。また、内閣府調査では回答者の年齢層が偏っており、60 歳以上が約 45% を占めるため、婚姻年齢層の意見が反映されにくい点も問題として示された。

通称使用の拡大を図る場合でも、現行制度には明確な限界がある。介護保険、年金、税、各種行政文書等では通称は認められておらず、民間でも銀行・証券会社・クレジットカード等で利用できない。また、通称は海外で通用せず、パスポートの IC チップには戸籍名のみ記載されるため、査証照合などで混乱を生む。氏の喪失によるアイデンティティへの影響についても議論され、世界の多くの国では「氏の保持は人権」という考え方が確立していることが紹介された。各国ではすでに「子の氏の選択の平等化」に議論が移行し、米国・カナダ等では複合姓が広く認められている。講演では、日本の最高裁における女性裁判官数の少なさにも触れられ、ある女性裁判官が「家族の問題になると、民主的な判断をされていた方も強硬に反対されるこ

とがある。姓に関する問題では男女差が顕著に現れる」と述べたことが紹介され、女性裁判官の増加の必要性も指摘された。

続くパネル討論では、登壇者がそれぞれの経験や立場から、旧姓使用や夫婦別姓制度が研究者・技術者の活動に与える影響について話題提供を行った。まず、九州大学農学研究院・日本学術振興会特別研究員（PD）の加反真帆氏から、海外調査における通称使用の困難について報告があった。加反氏はインドネシア農村部で資源管理に関する研究を行っており、渡航には倫理審査、調査ビザ、滞在許可の取得が必須である。これらの手続きでは、所属や身分、戸籍名、パスポート番号が1つでも変更されると再申請が必要となり、1回あたり約5万円の費用がかかるという。また、研究成果の発信においても旧姓使用が認められないケースが多く、パスポートの別名併記もICチップに反映されないため査証や航空券の照合には利用できない。海外をフィールドにもつ若手研究者にとって、結婚後に旧姓が使えないことは大きなハードルとなることが示された。

続いて、産業技術総合研究所特別研究員の吉澤和子氏が、海外滞在の際に旧姓と戸籍名が混在することで発生したトラブル事例を紹介した。留学時、戸籍名で合格通知を受けながら現地では旧姓を使用したいと希望したものの、大学との調整が不十分であったため、滞在許可証（戸籍名）、学生証（戸籍名+旧姓併記）、通称（旧姓）の三種類が異なる状態となり、大きな混乱が生じたという。また、公募段階では戸籍名と通称を併用できる場合でも、採用手続き時には戸籍名でのみ処理され、旧姓利用を開始しても人事システムの不具合によって戸籍名が表示され続けるなど、実務上の課題が多いことが示された。

次に、パシフィックコンサルタンツ株式会社の飯島玲子氏が、技術者としての立場から、改姓や旧姓併記が職務実績の管理や専門職としての信用に与える影響について述べた。飯島氏は幼少期から改姓によるアイデンティティ喪失への不安を抱えていたという。技術士資格では旧姓併記が制度上認められているものの、組織によっては人事システムが対応しておらず、改修にもコストや手間がかかる。専門職としては「同一人物であることの明確さ」が重要であり、姓の変更による記録の分断は

避けなければならないという強い問題意識が示された。

さらに、東京大学大気海洋研究所の沖野郷子教授は、「旧姓併記のなまぬるさ」と題して、制度の不完全さを自身の経験を交えて指摘した。法律婚でなければ共同親権が得られないことや、生命保険契約・結婚祝いの受領など、様々な局面で不利益を被ったこと、またパスポートのICチップが戸籍名のみを記載するため渡航のたびに多くの手続きが必要となる現状が語られた。沖野氏は、男性は改姓の当事者にならない場合がほとんどで問題意識を持ちにくいとし、「次世代にこの問題を残していくのか」という問い合わせながら、社会全体で取り組む重要性を強調した。

最後に、国際緑化推進センター技術顧問・森林総合研究所フェローの田中浩氏が、男性でありながら事実婚を選択した立場から、長年の経験と課題を共有した。1994年に事実婚を始めて以来、周囲の理解もあり日常生活に大きな支障はなかったものの、親権が得られない、失業時に配偶者の扶養に入れない、配偶者ビザが取得できない、介護施設に夫婦で入れない、相続に関する不安が残るなど、多くの制度上の困難が存在することが述べられた。また、事実婚や旧姓使用を選ぶ男性は非常に少なく、男性は「制度による不利益の当事者」として問題を捉えにくい傾向があると指摘された。しかし、少数派として生活したことで社会の固定観念や偏見に気づくようになったと語り、制度の改善には多様な立場の経験を踏まえた議論が不可欠であると結んだ。

講演後には、登壇者およびファシリテーターの田中浩氏（森林研究・整備機構 森林総合研究所・フェロー）によるパネルディスカッションが行われた。議論は主に、選択的夫婦別姓制度の導入をめぐる三つの論点（①家族の一体感との関係、②通称使用の限界、③次世代への課題と男性へのメッセージ）を中心に展開された。まず、夫婦別姓の導入に対する懸念として、「家族の一体感が損なわれるのではないか」「子どもの姓をどうするか」といった点が取り上げられた。これに対し、登壇者からは、国会答弁でも示されたように「夫婦別姓を導入している他国で家族の分断を示すデータは存在しない」との事実が紹介さ

れた。また、通称使用を経験している参加者からは、「仕事と家庭で異なる姓を使う場合でも、子どもに早くから事情を説明すれば理解が得られる」「家族内では姓を使わない場面が多く、実際に困ることは少ない」との意見があった。さらに、「家族の一体感とは互いの愛情であり、姓とは無関係である」という考え方も共有された。実際、調査では“家族の一体感と姓は関係ない”と考える人が全体の約6割、若者世代では7割にのぼるという。事実婚から法律婚に移行した人の多くは、「子どもの将来」や「制度的な保障」を理由に挙げており、「家族の一体感」を求めた結果ではないことも紹介された。続いて、現行の通称使用制度の拡大だけでは問題が解決しない点についても議論がなされた。行政手続きの電子化により、個別の柔軟な対応を求めてくくなっていることや、通称の利用範囲が拡大すればそもそも戸籍名の必要性自体が問われるという制度的矛盾が指摘された。また、通称使用では「姓と名の組み合わせが変わることで生じる違和感」や、「改姓によるアイデンティティ喪失」が解消されないという心理的課題も大きい。中には、改姓手続きの煩雑さや、名前を失う喪失感からうつ状態に陥る人もいるとされ、個人差は大きいが深刻な影響を受けるケースがあることが共有された。最後に、男性に対して伝えたいことや今後の課題について意見が交わされた。長年にわたって議論が続く中で「変わらない現状」への諦めの気持ちを抱く声がある一方で、「この問題を率直に話し合えたこと自体に意義がある」との前向きな意見もあった。改姓に伴う手間や精神的ダメージの重さを踏まえ、「次の世代のために何とかしたい」「今のままでは若い世代、特に非正規雇用や研究職などキャリアを積み重ねる世代に過大な負担がかかる」との懸念が共有された。議論の締めくくりとして、「個人の尊重と選択の自由を社会全体で支えることが、次の世代にとってより公平で持続的な社会につながる」というメッセージで意見が一致した。

最後に幹事学会からの挨拶として佐藤宣子氏（連絡会第23期運営委員会委員長）、および次期幹事学会からの挨拶として坂内 健一氏（日本数学会）が登壇したのち終了した。

今回のシンポジウムの詳細は、男女共同参画学協会連絡会のウェブサイト

(<https://www.djrenrakukai.org/symposium1.html>) に掲載されている報告書、資料集、基調講演資料、パネリスト資料、選択的夫婦別姓に関するアンケート報告などをご参照いただけます。また、本シンポジウムに関連し、連絡会の2021年大規模アンケート調査を用いた記事が2025年11月4日号のNatureに掲載されており、日本の研究環境やジェンダー平等の課題、選択的夫婦別姓制度の必要性について研究現場の視点から論じている。こちらも連絡会HPより参照可能である。

写真1：ポスター発表の様子



記 事

I. 次々期会長候補及び次期代議員選挙結果

日本生態学会選挙管理委員会
委員長 三木 健

2025年10月31日に投票を締め切り、11月11日オンラインにおいて開票を行った結果、次々期会長候補および次期代議員は下記のように決定いたしました。

総投票数 404 票（投票率 10.64%）。

1. 会長候補（任期 2028 年 3 月～2030 年 3 月）

	氏 名	得票数
選出	佐竹 曜子	105
次点	吉田 丈人	81
	中野 伸一	71
	辻 和希	69
	村岡 裕由	36
	その他33名（合計）	39
	白票	3

2. 代議員（任期：2025年12月～2027年12月）

1) 全国選出の代議員（15名）：同得票数の場合は年少者を優先します。次点者までを示しました。

順位	氏 名	所属地区会	得票数
1	黒川 紘子	近畿	54
2	西廣 淳	関東	47
3	内海 俊介	北海道	45
4	鏡味 麻衣子	関東	42
5	近藤 優生	東北	35
6	赤坂 宗光	関東	34
6	東樹 宏和	近畿	34
選出	丑丸 敦史	近畿	33
8	瀧本 岳	関東	33
10	土居 秀幸	近畿	32
11	石濱 史子	関東	31
12	村岡 裕由	関東	29
13	大澤 剛士	関東	28
13	吉田 丈人	関東	28
15	佐藤 拓哉	近畿	27
次点	角谷 拓	関東	25

2) 地区選出の代議員（7名）：選出・次点とともに、全国選出でも選出された場合は全国選出を優先し、同得票数の

場合は年少者を優先します（*）。（ ）内は得票数で、次点者および、同得票数獲得者まで示しました。

北海道	選出：小泉 逸郎 (9) 次点：森本 淳子 (5)
東北	選出：富松 裕 (9) 次点：宇野 裕美 (6)
関東	(全国) 鏡味 麻衣子 (14) 選出：佐々木 雄大 (12) * (全国) 石濱 史子 (12) * 次点：曾我 昌史 (10)
中部	選出：日室 千尋 (5) * 次点：阿部 晴恵 (5) * 北村 俊平 (5) *
近畿	選出：山尾 優 (8) * (全国) 佐藤 拓哉 (8) * (全国) 丑丸 敦史 (8) * 次点：木庭 啓介 (7)
中国・四国	選出：保坂 哲朗 (7) 次点：永松 大 (5) * 宮竹 貴久 (5) *
九州	選出：細川 貴弘 (11) 次点：立田 晴記 (10)

II. 学会賞受賞者決定

- 第24回日本生態学会賞
高村典子（長野県諒訪湖環境研究センター）
- 第30回日本生態学会宮地賞
岩崎雄一（産業技術総合研究所）
宇野裕美（東北大学大学院生命科学研究科）
西尾治幾（滋賀大学データサイエンス・AI イノベーション研究推進センター / 京都大学 生態学研究センター）
- 第19回日本生態学会大島賞
竹内やよい（大阪公立大学大学院理学研究科 / 国立環境研究所 生物多様性領域）
- 第14回日本生態学会奨励賞（鈴木賞）
飯島大智（筑波大学生命環境系）
岩知道優樹（東京都環境科学研究所）
大竹裕里恵（京都大学生態学研究センター）
富田幹次（高知大学）
松尾智成（ワーヘニンゲン大学）
- 第3回日本生態学会自然史研究奨励賞
大塚泰介（滋賀県立琵琶湖博物館）
徳田誠（佐賀大学農学部 / 鹿児島大学大学院連合農学研究科）

第24回日本生態学会功労賞
占部城太郎（東北大学）

III. 書評依頼図書（2025年5月～2026年1月）

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局(office@esj.ne.jp)までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 湯本 貴和・佐久間 大輔・鎌田 磨人・原 慶太郎編「**図説 日本の里山—73 の里山のくらしと生物多様性一**」（2025）184pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-17197-6
2. 国立科学博物館監修「**自然史標本のつくり方**」（2025）152pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-17198-3
3. 深野祐也著「**世界は進化に満ちている**」（2025）150pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-00-029734-9
4. DK 社編 清水晶子訳「まるごとわかる！植物と菌類のサイエンス大図鑑」（2025）208pp. 河出書房新社 ISBN:978-4-309-25474-6
5. 「野生生物と社会」学会（編）・日本哺乳類学会 日本鳥学会（協）「**野生動物の保全と管理の事典**」（2025）480pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-18069-5
6. 日本光合成学会編「**植物研究の進め方 原理と実験例**」（2025）200pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-17202-7
7. 京極大助著「**Excelでひも解く進化のしくみ—進化生物学入門一**」（2025）180pp. 丸善出版 ISBN:978-4-621-31217-9
8. Douglas J. Futuyma 著 的場知之訳「**鳥はいかに進化しているか Futuyma 先生の進化生物学講座**」（2025）336pp. 丸善出版 ISBN:978-4-621-31211-7
9. 一般社団法人日本哺乳類学会編「**哺乳類学の百科事典**」（2025）548pp. 丸善出版 ISBN:978-4-621-31196-7
10. 辻和希著「**利他と血縁 社会生物学入門**」（2025）258pp. 岩波書店 ISBN:978-4-00-006152-0
11. 森田健太郎著「**サケマス物語—魚の放流を問い合わせなおす**」（2026）224pp. ちくま新書 ISBN:978-4-480-07720-2

IV. 寄贈図書

1. 「公益財団法人鹿島学術振興財団第49回2024年度年報」（2025）480pp. 公益財団法人鹿島学術振興財団
2. 「公益社団法人日本畜産学会創立100周年記念誌」（2025）387pp. 公益社団法人日本畜産学会

V. 地区会報告

北海道地区会

2025年地区会報告（2025年1月～12月）

- (1) 全国大会（第72回日本生態学会大会ESJ72）を担当 第72回日本生態学会大会（2025年3月15日～18日札幌コンベンションセンター）を担当した。大会会長を仲岡雅弘地区会長が、大会実行委員長を小泉逸郎氏が務め、多くの地区会員の協力のもと大会を運営した。
- (2) 庶務・会計報告 2024年の庶務・会計報告についてメールで報告および審議がなされた。
- (3) 役員選挙 会長の選挙および地区役員（任期2026年4月～2028年3月）の選挙をオンラインで実施した。
有権者：投票2か月前にあたる8月1日時点で、下記の二つの条件を全て満たす方
 1. 北海道地区を「連絡先住所」（=郵送物発送先住所）としている正会員の方
 2. 会費を1年分以上完納した方投票期間：2025年10月1日0:00～10月31日23:59
11月1日に選挙管理委員および庶務幹事がオンライン開票の結果を確認。
開票結果：投票総数49票。次期会長は、仲岡雅裕氏（北海道大学・北方生物圏フィールド科学センター）が27票で選出。次点は相場慎一郎氏（北海道大学・地球環境科学研究院）の7票。役員選挙では、安東義乃氏（合同会社エゾリンク、北海道大学・地球環境科学研究院）、内田葉子氏（北海道立総合研究機構）、菊地賢氏（森林総合研究所・北海道支所）、露崎史朗氏（北海道大学・地球環境科学研究院）、日野貴文氏（北海道立総合研究機構）が信任された。

東北地区会

- (1) 東北地区会第70回大会を開催
日程 2025年12月6日（土）～7日（日）
会場 6日：岩手大学 <https://www.iwate-u.ac.jp/access.html>
(岩手県盛岡市上田3-18-8)
7日：いわて県民情報交流センター（キオクシアアイーナ）<https://www.aiina.jp/soshiki/2/21.html>（盛岡市盛岡駅西通1-7-1）
大会ウェブサイト <https://sites.google.com/view/esj-tohoku70>
一般講演（口頭発表）
高橋一華（岩手大）「イノシシの個体群構造の推定—分布拡大中の東北地域における事例—」
清水まいや（岩手大）「カメラトラップとDNA解析を用いた野生動物相と食害実態の解明—北上市の桑園における事例

—」

奈良岡胡春（福島大院・理工）「広島県大久野島のアナウサギ集団はどのように形成されたのか？」

古川弦（岩手県大・総合）「岩手県北上市におけるツキノワグマの出没密度」

箱崎淳太朗（福島大・理工）「ツキノワグマにおける Y 染色体 SSR マーカー開発」

大山雄太郎（石巻専大院・理工）「金華山島のニホンザルにおける海藻採食行動はどんな時に多く見られるのか—各海藻類の利用可能性からのアプローチ—」

渡部紘（東北大院・生命）「ライチョウの潜在分布推定における気候要因の解析」

山田真綺（弘前大院・農生）「2種の外来魚種がカンムリカイツブリの繁殖地選択におよぼす影響」

小林朋世（東北大・理・生物）「広域データを用いたシャチサブタイプの環境利用特性の検証」

四十物弦希（秋田県大）「秋田県のブナ林における堅果と殻斗を利用する昆虫類調査」

森大岳（秋田県大）「植物の形質の違いがオンブバッタの食害量に与える影響についての研究」

鈴木楓生（岩手県大・総合）「ゴマシジミの保全に向けた生態調査」

三浦吹（弘前大・農生）「宿主の飛翔に応答する共生ダニの位置移動」

澤田悠佑（東北大・理）「都市における土壤ダニ群集構造についての研究計画と経過」

甲地由樹（石巻専大・理工）「汽水性多毛類ヤマトスピオの地理的遺伝構造」

田崎周（東北大院・生命）「伊豆沼における夏季貧酸素化に対する魚類の避難戦略：流入河川と表層水の利用」

岩下知（東北大・理・生物）「北海道の天然氾濫原における止水性水生昆虫群集の季節消長」

佐々木あゆ（岩手医大・医）「岩手県高松の池から採集された *Diacyclops cf. bicuspis* (カイアシ綱、キクロプス科) の形態的精査と DNA 解析」

去石灯（東北大）「日本のダム湖における植物プランクトンの種の多様性に及ぼす要因を探る」

谷川涼太（石巻専大・理工）「宮城県石巻市渡波海岸における海岸ベントス相」

高橋陽大（石巻専大院・理工）「コケゴカイ（環形動物門：ゴカイ科）における生殖群泳と生殖変態の初記録—長年知られなかった繁殖生態の解明—」

小田晴翔（石巻専大院・理工）「クロベンケイガニにおける性的二型の進化要因の検討—社会行動からのアプローチ—」

加藤駿（東北大院・生命）「アユが河川生態系に与える影響

について～藻類群集に着目して～」

片倉陽之介（東北大院・生命）「三陸と北海道東部における海藻の生息量の時間変化のパターンとプロセスの比較」

大見川遙（石巻専大院・理工）「行動観察による海産等脚類の球体化の捕食回避機能および乾燥耐性機能の評価」

鈴木頑通（東北大院・生命）「農薬が動物プランクトンに及ぼす影響：イミダクロブリドを用いた検証」

高橋和寿（東北大院・農）「外生菌根菌テングタケ菌輪およびブナとの共生系における電気的活性」

千葉あおい（東北大院・農）「菌類の種数と他種との接触機会が材分解に与える影響」

佐々木暖日（秋田県大）「SSR マーカーを用いた角館のシダレザクラの遺伝的特徴」

細井理桜（秋田県大院）「ブナとミズナラの花リターと葉リターから浸出する窒素とリン」

堀文哉（弘前大院・農生）「ブナの花芽生産に葉フェノロジーが与える影響」

公開講演会「災害と生態学」(岩手生態学ネットワークとの共催)

金谷弦（国環研）「東北の海が変わるとき—東日本大震災と気候変動がもたらしたもの—」

松本一穂（岩手大・農）「大船渡山林火災が森林の機能や環境にもたらす影響」

酒井敦（森林総研・東北）「大規模林野火災により森林植生はどう変化したか—火災後1年目の報告—」

(2) 地区委員会報告

2025 年度定例地区委員会は、2025 年 12 月 6 日に岩手大学で開催され、以下の議題について報告および審議がなされた。出席者は次の 18 名であった。松政正俊（地区委員長）、石田清、星崎和彦、木村恵、鈴木まほろ、占部城太郎、近藤倫生、陶山佳久、牧野渡、富松裕、兼子伸吾、福島慶太郎、高橋雅雄（自然保護専門委員）、松木佐和子（大会実行委員長）、島田直明（大会実行副委員長）、野口麻穂子（会計幹事）、菅原太朗（庶務幹事）、黒沢高秀（同）

<報告事項>

・庶務報告

菅庶務幹事より、2025 年度 12 月までの活動状況と会員動向について報告があった。

- 1) 2025 年 1 月 15 日：日本生態学会東北地区会会報 85 号を発行・メール告知（地区会事務局）
- 2) 2025 年 10 月 6 日：第 70 回地区大会の案内をメール配信（東北地区会大会実行委員会）
- 3) 2025 年 12 月 1 日：第 70 回地区大会の案内（要旨集ほか）をメール配信（東北地区会大会実行委員会）
- 4) 2025 年 12 月 6~7 日：第 70 回地区大会（岩手県担当）

一般講演、定例地区委員会、地区大会総会、公開講演会

・会計報告

野口会計幹事より、2024年度決算と会計監査について報告があった。

・岩手生態学ネットワーク活動報告

鈴木委員より、2024年12月21日に市民講座を実施したこと、2025年12月7日に日本生態学会東北地区会と共催で市民講座を予定していることについて報告があった。

<審議事項>

・選挙管理委員の推薦

2026年7月31日に任期が満了する現地区委員の改選選挙に関し、選挙管理委員として、牧野渡氏（東北大）と藤山直之氏（山形大）が推薦され、承諾された（地区大会総会で追認）。

・2025年度予算執行状況および2026年度予算案

野口会計幹事より、2025年度予算執行状況について説明がなされ、承認された。

次いで、2026年度予算案について説明がなされ、「岩手生態学ネットワーク支援費」50,000円を引き続き計上するなどの案が示された。繰越金の削減と有効活用のため、引き続き、地区大会・講演会の小計を250,000円に引き上げて総会に提案することになった。あわせて、岩手生態学ネットワークの2025年度執行状況ならびに2026年度予算案について説明がなされた。これらも含めて、承認された（予算執行状況および予算案のいずれも、地区大会総会にて追認）。

2026年度予算案と関連して、過剰になっていた繰越金の削減と有効活用のために2024年から大会開催予算を20万円前後に増額して運営していることや、2026年度の予算案の単年度支出を毎年使った場合、5年ほどで過剰な繰越金を使い切る見込みであるとの説明がなされた。その上で、今後の繰越金削減の方針（最低繰越金の目標額と削減ペースの妥当性等）について意見聴取が行われた。これについて、物価高騰で会場費なども値上がりする傾向にあることから、現行の地区大会・講演会の活動規模を維持したまま5年後に地区大会経費を以前のとおりの15万円に戻すことは困難であることを理由に、地区還元金（地区会活動費）の増額を理事会にお願いしてはどうかという意見が出された。

・次回、次々回地区大会開催地

昨年度地区委員会・総会で承諾されたとおり、次回大会（2026年）を秋田県で開催することが確認された。次々回大会（2027年）については、昨年度の地区委員会において「全国大会を宮城県で行った際に、その分地区会の開催を1回スキップすることについて、昨今の情勢に鑑みて再検討できないか」という意見が出たことを受けて、事前に宮城県に開催の検討を依頼していたことが報告された。また、今後も宮城

県での開催をスキップする場合、次々回は、「東北地区会運営の手引き」の「別表1 東北地区開催地一覧」の順番に従って山形県になること、これに関して山形県は2027年もしくは2028年の開催を了承済みであることが説明された。他県も交えた意見交換の結果、近隣の県などが協力して開催県を支える仕組みを構築してはどうかという意見が出た一方で、オンラインの大会において開催県以外の県が協力できることは限られている、との意見も出た。また、大会参加者の多くを占める学生にとって、地区大会は他県を巡る貴重な機会でもあるため、できるだけ多くの県で開催することが望ましいという意見も出た。これらの意見を踏まえて、ひとまず次々回は山形県にお願いすることとし（地区大会総会で追認）、並行して、他県との協力体制の構築にむけた議論を進めいくこととした。

・追記：自然保護専門委員の推薦（メール審議）

2026年4月1日からの自然保護専門委員（東北地区委員）について、地区委員会・総会後の12月22日～24日に行われたメール審議により、黒沢高秀氏（福島大）と高橋雅雄氏（岩手県立博物館）が推薦され、承諾された（両氏とも再任）。

<その他>

・次年度地区大会について

秋田県委員より次年度の地区大会について説明がなされた。

・自然保護専門委員会の活動報告

黒沢自然保護専門委員会委員より、他学会と合同で提出予定の要望書等についての説明がなされた。

・総会議長について

大会実行委員長が行うこととなった。

(3) 地区大会総会報告

2025年度東北地区会総会は、2025年12月7日にいわて県民情報交流センターで開催された。議長に大会実行委員長の松木佐和子氏（岩手大学）を選出し、以下の議題について報告および審議がなされた。

・庶務報告および会計報告が了承された。

・岩手生態学ネットワークの活動について報告がなされた。

・選挙管理委員の推薦について、原案どおり承認された。

・2025年度予算執行状況および2026年度予算案が原案どおり承認された。あわせて今後の繰越金削減の方針について共有された。

・次年度の岩手生態学ネットワークの活動に対する支援が原案どおり承認された。

・地区大会開催地について、次回は秋田県で開催することが確認され、次々回大会は山形県で行うことが審議・承認された。あわせて、開催地の県と他県の協力体制の構築にむけた議論を今後進めていく方針が共有された。

(4) 発表賞の表彰

本地区大会一般講演について、参加一般会員の審査により地区大会発表賞最優秀賞 2 名、優秀賞 4 名を選出し、表彰した。

最優秀賞 三浦吹（弘前大・農）、高橋陽大（石巻専大院・理工）

優秀賞 大見川遙（石巻専大院・理工）、鈴木碩通（東北大院・生命）、千葉あおい（東北大院・農）、去石灯（東北大院・生命）

関東地区会

2025年（1月～12月）活動報告

(1) 地区委員会・地区総会報告

2025年3月4日に地区委員会および地区総会報告を、オンライン（zoom）で実施した。地区委員会には参加者11人・委任が6名であった。総会は参加者13人・委任が6名であった。2024年度の活動報告および決算報告がなされ、2025年度予算案が審議され、承認された。新たに Ecological Research 誌に投稿・受理された関東地区会委員の論文のオープンアクセス費用の一部補助事業を開始することとなった。

(2) 2025年2月16日に第45回関東地区会生態学関係修士論文発表会をハイブリッド（対面：東京大学大気海洋研究所、オンライン zoom）で開催した。また、併せて東京農工大学の酒井理博士による特別講演「動物の個性を理解する：その歴史と発達形成の観点から」が行われた。修士論文発表は以下の通りであった。

【口頭発表演題】

富塚暖史（東京都立大学大学院）「mimic 種の進化がベイツ型擬態系の生態学的帰結に与える影響」

安田晶南（弘前大学大学院）「クロサンショウウオの卵嚢における透明から乳白色への進化はイモリの捕食圧によって生じたか？」

長谷川隼也（東京大学大学院）「三陸沿岸で繁殖するオオミズナギドリの採餌旅行に関する研究」

安樂健太（東京大学大学院）「3種共存域における種間競争からの解放がオショロコマ個体群に及ぼす生態学的影響」

小幡愛（東京大学大学院）「北海道における動的植生モデルを用いたササ類の分布、バイオマスの将来予測」

杉本菖武（東京都立大学大学院）「昆虫の移動分散を人間活動が促進する－都市域におけるヨツモンカメノコハムシの分散を例に－」

鍵和田さくら（東邦大学大学院）「国内外来種リュウキュウツヤハナムグリが在来ハナムグリに及ぼす影響の評価」

朝鍋遙（東京大学大学院）「絶滅が危惧される沿岸性ウミアメンボ類の保全ゲノミクス：限られた海流分散による高い

遺伝的固有性」

鎌田真壽（東京大学大学院）「オニヒトデの嗅覚に着目した

サンゴ認識・捕食行動における分子メカニズムの探索」

兼祐翔（東京大学大学院）「クビワオオコウモリにおける生息地利用の個体差は年齢が影響しているのか？－エピジェネティッククロックによるアプローチ－」

秋山礼（東京大学大学院）「日本産ユビナガコウモリの系統地理～洞穴分布に注目して～」

【ポスター発表演題】

滝山直人（東京海洋大学）「ソメンヤドカリとベニヒモイソギンチャクの相利共生における宿主認知の可能性」

菅野省吾（東京大学大学院）「ビデオロガーを用いたアオウミガメ食性解析と腸内細菌の成長段階・地域間比較」

福澤航生（東京大学大学院）「北海道知床半島におけるオシヨロコマ (*Salvelinus curilis*) とイワナ (*S. leucomaenis*) の浸透性交雑は適応度に違いをもたらすのか？」

四宮七瀬（東京大学大学院）「椎体の微量元素分析によるサクラマスの回遊履歴復元～“骨”の微量元素は生態解明の鍵となるか～」

小山初菜（東京大学大学院）「三陸沿岸に来遊するアカウミガメの回遊における年変動」

本田真奈（玉川大学大学院）「倒流木の形態による有機物滞留の違いが底生生物相に及ぼす影響」

(3) 2025年4月19日にハイブリッド（対面：東京大学弥生キャンパス、オンライン zoom）下記の日本生態学会関東地区会公開シンポジウムを開催した。

タイトル：Implications of animal personality in the modern changing world

企画者：酒井理（東京農工大学）・内田健太（東京大学）

概要：2000年以降の行動生態学において盛んに発展してきた研究トピックとして動物の個性（Animal personality）とヒトによる急速な環境変化（HIREC）への反応があげられる。これらの研究トピックは理論的枠組みの整理や実証研究を重ねて成熟してきたが、そのトピックに従事する研究者が着目する現象のスケールには依然としてギャップが存在している。そこで、本企画ではこれらのトピックに関する枠組みの融合を目的とし、様々な観点からその生態学的な帰結を議論した。特に、動物の個性や集団内の多様性を探求している演者をお招きし、社会形成、個体間相互作用、個体群の機能、捕食者－被食者系の観点から個性の意義について話題提供して頂いた。また、シンポジウムの最後には聴衆を巻き込んだグループ討論の時間を設け、「HIREC によって集団中を構成する個性が偏ると、どのような影響が生じるのか？」この問い合わせに関して様々な背景を持つ研究者

からのフィードバックを頂いた。

当日の参加者は合計で 96 名に達し（現地参加が 32 名、オンライン参加が 64 名）、日本の学術界では馴染みの薄い研究トピックに対しても活発な質疑応答や議論が行われた。参加者の年齢層は幅広く、所属機関は多岐に渡っていた。

さらに、本シンポジウムでは全て英語を用いて進行するという事もあり、日本語を母国語としない参加者の姿も見受けられ、国際色の豊かなシンポジウムとなった。強いて聴衆や参加者の特徴を挙げるならば、比較的若手の研究者（学生、ポスドク、助教）が多い傾向にあり、日本の行動学や生態学においても新たな潮流が起りつつある気配を感じさせるものであった。また、シンポジウム後には懇親会も催され、15 名ほどの参加者が軽食を片手にカジュアルな雰囲気で更なる議論の機会を楽しんだ。特に、日本の研究者にとって Sih 教授と研究内容やキャリアに関してゆっくりと話せる機会は貴重な経験となり、参加者からはとても好評であった。

翌日（4月 20 日）には小人数（8 名）での深い議論の場を設けた。午前 11 時から開始し、お昼休憩を挟んで、午後 4 時にグループ討論は終了した。Animal personality と HIREC の理論的な枠組みを統合させた場合、予測される生態学的な帰結に関して具体的なシナリオを交えながら意見を交わした。これらの議論の内容は意見論文としてまとめて学術雑誌に投稿すること目標として掲げ、討論の参加者で具体的な方針を共有した。今回のシンポジウムはこの一連の動向の出発点としての役割を持ち、今後も定期的な意見交換を交わしながらレビュープロジェクトを推進していくことで話がまとまった。

Andrew Sih (University of California, Davis) 「Why should ecologists care about animal personalities or behavioral syndromes: three case studies」

Shiomi Hakataya (University of the Ryukyus) 「How is personality linked to social interaction patterns?」

Wataru Takeda (Nagoya University) 「Personality in Seabirds: Relationships with Breeding, Foraging, and Repeated Human handling」

Yuma Takahashi (Chiba University) 「Less is Bore, More is More: Ecology of Individual Differences」

Takahira Okuyama (Chiba University) 「Heterogeneity resolves the behavioral trade-off between exploration and vigilance in *Drosophila*」

Kentaro Matsumura (University of Tokyo) 「Effects of individual differences in the locomotor activity of assassin bugs on predator-prey interactions」

(4) 2025 年 4 月 26 日にオンライン（zoom）にて、下記の日本生態学会関東地区会公開シンポジウムを開催した。

タイトル：生物を知り、守る生態学

企画者：平野日向（農工大院）・上野尚久（遺伝研）・大崎壯巳（早稲田大）・岡田遼太郎（高知昆虫研究会）・蕪木史弦（新潟大）・佐々木悠人（愛媛大）・永濱藍（科博）・夫婦石千尋（九大院）

概要：近年、気候変動や人為的擾乱の影響により、希少種や絶滅危惧種の保全が重要視され、関心を持つ人は増えている。しかしながら、実際に保全学に携わる研究者は依然として少なく、特に生態学を学ぶ学生の中で保全研究に進む人材の数は限られており、今後、保全生態学の分野を発展させるためには、関心を持つ学生や若手研究者が情報交換できるコミュニティが必要である。また保全生態学は生物多様性の維持・回復という目的を達成するための学際的な分野であることから、様々なバックグラウンドを持った研究者が交流できる機会は重要である。本企画は、オンライン形式での交流を通じて、保全学に関心を持つ学生や若手研究者がつながる場を提供し、保全生態学の発展の一助となることを目指した。保全生態学を実践する研究室は地域密着型であることが多く、地方大学に所属する研究者にとっては、対面で実施される研究集会への参加が難しい場合がある。すなわち、地理的制約を超えた広範な研究者ネットワークを構築し、継続的な情報交換や協力の機会を生み出すことが重要となる。そこで本企画では、オンラインで開催することで、様々な生物分野に興味関心を持つ研究者および大学院生を招待し、講演を通じて異分野間の交流を促進する。また今回は新たな試みとして、事前に設定したテーマに基づき、参加者が積極的に意見を交わすグループディスカッションの場を設けた。このような活動を通して、参加者には各自の関心分野の理解を深めるとともに、研究課題やその解決策について新たな視点を得る機会としていただく。このように、多様な背景を持つ参加者が交流できる場を設け、多様な視点を持つきっかけを提供することで、保全生態学への関心を深めることにつなげることを目的とした。

当日は約 60 名の参加者が集まり、前半は講演セッション、後半はテーマディスカッションを実施した。ディスカッションでは、各演者の専門分野における課題や現状について活発な議論が交わされた。その中では、フィールドでの研究経験に基づく調査にとどまらず、生態学分野をいかにマネタイズしていくかという、極めて建設的かつ実践的な内容であり、今後の分野発展において重要な議論が展開された。さらに、共催いただいた保全生態学若手の会の方々とも、スタッフ同士の交流を通じて交友関係を深めることができた。以上の点から、今回のシンポジウムは参加者・スタッフ双方にとって有意義な会であったといえる。

第1部

大川夏生（日本大学）「侵略的植物アカギから守れ！ 一小
笠原の希少植物保全の今—」

江指万里（北海道大学）「謎多き希少種オオコノハズク —
巣箱を用いた生態調査と保全について—」

片岡利文（東京都立大学）「超希少種ヤクシマウスユキソウ
の分類学的改定と生育域外保全」

菅原早紀（鹿児島大学）「天然記念物ヤエヤマセマルハコガ
メの生態」

第2部

出戸秀典（ミヤマシジミ里の会事務局）「農地に生息する希
少種を研究対象にする面白さと難しさ～ミヤマシジミを例
として～」

二村凌（Leibniz Institute of Freshwater Ecology and Inland Fisheries）
「魚釣りがもたらす生態学的な帰結：全生態系モニタリング
による実証研究」

深野祐也（千葉大学）「進化生態学者がビジネス界隈に潜入
してみた話」

亘 悠哉（森林総合研究所・主任研究員）「奄美大島のマンゴ
ース根絶達成までのブレイクスルー」

第3部 グループディスカッション

①植物の分類をどのように保全に生かすか

②希少植物の保全と植物園の役割

③西表島でハコガメと共生するための取り組み

④希少動物を対象としたフィールド調査とアウトリーチ活動

⑤保全×行動生態学

⑥チョウ類の保全と住民組織による実践

⑦外来種対策と順応的管理課題

⑧生態学とビジネスの関わり方

中部地区会

2025年度中部地区大会および総会の開催

開催日時：2025年11月30日（日）11:30～16:30

場所：名古屋大学東山キャンパス豊田講堂

（1）総会（11:30～12:30）出席者 16 名（うち、オンライン参
加者 5 名）

【報告事項】

・中部地区会事務局について

2024年度総会において2025年1月～2026年12月の中部地区会長として梶村恒氏（名古屋大学）が選任され、事務局が名古屋大学に置かれることとなり、事務局構成員（幹事）として、会計・谷川東子氏、庶務・中川弥智子氏、監査・石川由希氏が会長により指名されたことが報告された。

・中部地区会 2025年度研究助成実績

17件の応募があり、厳正なる審査の結果、以下の4件が採択

されたことが報告された。

◆山澤 泰（富山大・院・M2）「モグラ類のトンネルにおける
動物利用の実態解明に向けたカメラトラップ法の開発」

◆島田 将吾（新潟大・院・M2）「果実形質から見たカラス属
の種子散布における果実選好性」

◆熊瀬卓己（筑波大・院・M2）「北アルプスのシカはどこか
ら来ているのか？：侵入初期におけるシカ管理策の提案に
向けて」

◆川本 高司（名古屋大・院・D1）「ヒメキアリから解き明か
す「孵化しない卵」の意義」

・会計報告

事務局会計担当より、2024年度の会計報告および2025年度
の会計収支見込報告が行われた。

・中部地区代議員、自然保護専門委員会委員について

中部地区代議員：安藤正規氏（岐阜大学、2024年1月～2025
年12月20日）、日室千尋氏（岐阜大学、2025年12月21日
～2027年12月）

自然保護専門委員会中部地区委員（再任）：和田直也氏（富
山大学）、増田理子氏（名古屋工業大学）2024年4月～2026
年3月 *和田氏の後任を選出予定

・生態学会大会（本大会、2027年）の開催場所について

第74回日本生態学会大会（ESJ74）は、2027年3月18～21
日の日程で富山で開催されることが報告され、中部地区会員
の協力が呼びかけられた。

【審議事項】

・次年度の会計について

次年度も学生・大学院生に対する研究助成を、収入と支出の
バランスに留意しながら継続する計画が承認された。

・助成制度の金額上限の変更について

評価結果に助成金額を反映させられるよう、助成金額を「一
人10万円以内」から「一人15万円以内」に変更させること
が承認された。合わせて、助成制度のルールを明文化するた
め、要綱を作成することが決まった。

・次回の地区大会について

2026年度地区大会は、過去の実施県・大学を踏まえ、11月
前後を目途に静岡大学において実施することが承認された。

（2）研究発表会（13:00～16:30）参加者90名

冒頭、一人1分間のフラッシュトークを行った後、39件のボ
スター発表が行われた（発表リストは
http://www.esj.ne.jp/chubu/2025meeting_program.pdfから参照可能）。厳正な審査の結果、以下の3名の学生に優秀研究発
表賞が授与された（研究発表会後の懇親会時に披露：参加者
56名）。

◆ 荒木 実晋（富山大学理学部）「富山空港におけるバット
ストライク対策に向けたコウモリ類の音響モニタリング」

- ✧ 西亮憲（名城大学大学院農学研究科）「都市環境での緑地構造と捕食リスクがシジュウカラ及びスズメの生息地選択に与える影響」
- ✧ 山澤泰（富山大学大学院理工学研究科）「隠岐島後におけるモグラ 2 種の共存機構：景観と微小生息環境の違いから探る」

近畿地区会

(1) 2025 年 近畿地区会委員会および総会

日時：2025 年 12 月 7 日（日）

会場：大阪公立大学杉本キャンパスにおけるオンライン開催
ならびに Zoom によるオンライン開催

【委員会】

【議題】

1. 2024 年度会計について実績報告がなされ承認された。
2. 2025 年度会計について現時点での実績報告がなされ承認された。
3. 2026 年度事業計画と予算案について説明がなされ承認された。
4. 次期事務局（2026-2027 年）について提案がなされ承認された。

会長：石井弘明（神戸大学）

庶務幹事：杉浦真治（神戸大学）

会計幹事：東若菜（神戸大学）

【報告】

1. 2025 年度近畿地区会公募集会の決定と開催報告がなされた。
2. 2025 年度近畿地区会例会の開催報告がなされた。
3. 滋賀県への要望書提出とその回答に関して報告がなされた。
4. 自然保護専門委員会から提出した要望書 2 件のアフターケアについて報告がなされた。
5. 次期(2026-2027)自然保護専門委員の選出状況について報告がなされた。

【総会】

2025 年近畿地区会委員会での審議・報告事項について、議長から報告が行われ承認された。

(2) 2025 年 近畿地区会例会

日時：2025 年 12 月 7 日（日）

会場：対面開催（大阪公立大学理学部・杉本キャンパス）

以下の 9 件の口頭発表が実施された。質疑応答では活発な議論がなされた。

口頭発表：

1. 福家 悠介（摂南大・農），佐々木哲朗（IBO）「オガサワラヌマエビの進化的起源と遺伝的集団構造」

2. 近藤湧生，岡本鼓都里，小林龍太郎，小林優也，安房田智司（大阪公大・院理）「実験室は野外の繁殖時刻を再現できているのか？：24 時間連続観察が捉えたメダカの繁殖時刻のズレ」
 3. 小林優也，近藤湧生，幸田正典，安房田智司（大公大・理）「イソギンチャク資源の豊富さに基づくクマノミの社会システムと個体間関係の変化」
 4. 松村あぐり（奈良女大・博士前期）、吉田和弘（奈良女大）、川上華（奈良女大・博士前期）、岸川沙蘭（奈良女大・理）、上原春香（奈良女大）、遊佐陽一（奈良女大）「スクミリンゴガイ捕獲トラップの設置がイネの残存本数に与える影響」
 5. 松葉史紗子（京大・生存研），西嶋翔太（水産研究・教育機構），五十嵐弘道（JAMSTEC），石川洋一（JAMSTEC）「古典的水塊指標の再評価による底魚資源分布モデルの改良」
 6. 浅野有己斗，藤井健太，末次健司（神大・理）「シダ植物における新奇の菌根共生」
 7. 長沢誠（京大・農），檀浦正子（京大・農），持留匠（京大・農），Daniel Epron（京大・農）「スギ幹からのメタン放出はクマによる樹皮剥ぎと腐朽によってどう変化するか」
 8. 浅野悟史（京大・地球環境学），千葉樹里（京大・地球環境学），和田享（パナソニック），中田公明（パナソニック）「モズの「はやにえ」からみる工場緑地の機能と管理」
 9. 吉岡流空（滋賀県立大・環），野間直彦（滋賀県立大・環）「同じ巣穴を使うタヌキとアナグマのセンサーネットによる調査」
- このうち以下の 3 件の口頭発表に対して地区会奨励賞が授与された。
- ・福家 悠介（摂南大・農），佐々木哲朗（IBO）「オガサワラヌマエビの進化的起源と遺伝的集団構造」
 - ・近藤湧生，岡本鼓都里，小林龍太郎，小林優也，安房田智司（大阪公大・院理）「実験室は野外の繁殖時刻を再現できているのか？：24 時間連続観察が捉えたメダカの繁殖時刻のズレ」
 - ・浅野有己斗，藤井健太，末次健司（神大・理）「シダ植物における新奇の菌根共生」
- (3) 2025 年公募集会の決定と開催
- 生態学の進歩と普及を図るために、近畿地区会員が主催する生態学会員および一般市民を対象とした生態学関連の集会をサポートするため、公募集会について 2025 年 4 月 11 日～5 月 23 日まで募集を行った。応募は 2 件あり、地区会審査員および地区会員と協議した結果、2 件とも採択とし、応募金額を配当した。採択状況は以下の通りである。

- 1) それって技術? それとも力技? 一生態学の現場から考える多様な研究スタイル
 (担当: 湯本原樹/京都大学、近藤湧生/大阪公立大学)
 実施日: 2025年11月29日
 場所: 京都大学理学部・セミナーハウス (京都市左京区北白川追分町)
- 2) フィールドシンポジウム 大阪のレッドリスト改訂と生物多様性ホットスポット
 (担当: 前迫ゆり/奈良佐保短期大学)
 実施日: 2025年10月5日
 場所: 茨木市文化・子育て複合施設 おにくる7階会議室2 (大阪府茨木市駅前3丁目9-45)

中国四国地区会

- (1) 第68回中国四国地区大会 (2025年5月17, 18日 於: 愛媛大学)
【ポスター発表】(5月17日)
 「アラカシの堅果落下量の年変化に関する基礎研究—広島県宮島の例一」○小山克輝 (広島大・院・統合生命), 中原-坪田美保 (広島大・瀬戸内CNセ・宮島), フアン=クイン=チ (広島大・瀬戸内CNセ・宮島), 紙本由佳理 (広島大・瀬戸内CNセ・宮島), 内田慎治 (広島大・技セ), 坪田博美 (広島大・院・統合生命, 広島大・瀬戸内CNセ・宮島)
 「日本の暖温帯林下層に生育するウコギ科木本4種の生存・成長戦略の比較」○青柳仁士, 中林雅, 山田俊弘 (広島大学・院・統合生命) (**優秀賞**)
 「目覚めるのはいつ? ~山口県に生息するニホンヤマネの冬眠について~」○大宇根海人 (山口大・農), 上利恵里奈 ((元) 山口大・農, 大森鑑能 (山口県立山口博物館), 細井栄嗣 (山口大・院・創成)
 「タカハヤの認知形質に作用する増水時の空間的選別」○山田寛之 (学振PD, 愛媛大学) (**最優秀賞**)
 「食性解析から迫る複雑なマダコの摂餌選択」○山田真悠子 (島根大・自然科学研究科), 小野廣記 (島根大・生資), 佐藤成祥 (東海大学), 広橋教貴 (島根大・生資)
 「性成熟や交尾がヒメシュモクバエの闘争性に与える影響」○川口想世 (山口大・院・創成科学), 工藤愛弓 (山口大・創成科学)
 「カブトムシのメスにおける単回交尾のメカニズム」○山手颯太 (山口大・院), 圓尾明日香 (山口大・理), 小島涉 (山口大・院)
 「兵庫県のため池における外来タナゴ *Rhodeus albomarginatus* の繁殖生態」○谷口倫太郎 (岡山大・院・環境生命自然科学), 野口亮太 (流域保全ネット), 小山直人 (高安研究会), 中田和義 (岡山大・院・環境生命自然科学)

- 「外来種タイワンシジミの死貝から環境DNAは検出されるか?」○東哲平, 濱田麻友子, 勝原光希 (岡山大・院・環境生命自然科学), 勝間裕也, 川上潤 (岡山県・農林水産部・耕地課), 中田和義 (岡山大・院・環境生命自然科学)
 「マツヨイグサ根元へのアリの営巣が葉の食害率と植食性昆虫へ与える影響」○中村真愛 (山口大・院・創成科学), 工藤愛弓 (山口大・創成科学) (**優秀賞**)
 「広島県江田島沿岸におけるカシパン類2種の生息環境の比較」○斎藤聖 (広島工大・院・工学系), 岡浩平 (広島工大)
 「中国地方のイワナの在来系統の分布と放流による遺伝子攪乱の実態」○渡邊華奈 (山口大・院・創成), 西尾友佑 ((元) 山口大・院・創成), 細井栄嗣 (山口大・院・創成), 岩槻幸雄 (米良鹿釣俱楽部)
 「基準標本产地で採集した島根県固有種イシドジョウの比較ミトゲノム解析」○守岡里穂 (島根大・院・自然科学), 田中智美, 荒西太士 (島根大・生物資源)
 「ダムによる河川の分断がウグイとカワムツの集団構造に与える影響」○高橋駿之介, 畑啓生 (愛媛大学・院・理工)
 「南限のイワナ「ゴギ」における奇形個体の出現とその生態学的特性」○佐々木悠人, 田中悠真, 長谷川勝哉 (愛媛大・院・理工), 亀甲武志, 鳥澤眞介, 光永靖 (近畿大・農)
 「タンガニイカ湖南端の3地点における藻食魚類の遺伝的集団構造」○毛利彰訓 (愛媛大・理), 畑啓生 (愛媛大・院・理工)
 「仁淀川水系黒川におけるアマゴとイワナの生息場所利用～成長に伴う動的な資源分割～」○竹下航太郎, 佐々木悠人, 井上幹生 (愛媛大・院・理工)
 「広島湾西部における鳥類を指標とした人工干潟の再生状況の評価」○東直希 (広島工大・院・工学系), 岡浩平 (広島工業大学)
 「学名の裏側をズバリ解説: 魚類と動物プランクトンの語源を大規模言語モデルで探る」○菅野遙登 (福島大・院・共生理工学システム), 井下敬翔 (滋賀大・院・データサイエンス), 野尻康太 (東京大・院・農学生命科学, 東大・博物館), 多賀匠 (名古屋大・院・創薬科学)
 「高梁川河川敷における寄生植物ハマウツボの2010年と大規模攪乱を経た2024年の分布状況」○片岡博行 (重井薬用植物園)
 「一年生半寄生植物ホソバママコナ (ハマウツボ科) の生育状況および発芽特性」○山本晃弘 (広島市植物公園), 大崎壯巳 (早稲田大・教育総合, 学振PD), 和崎淳 (広島大・院・統合生命, 広島大・瀬戸内CNセ), 中坪孝之 (広島大・院・統合生命)
 「海岸砂丘のカワラヨモギ群落への降雨遮断実験」○永松大, 吉原瑞希, 衣笠利彦 (鳥取大・農), 寺本宗正 (鳥取大・乾

地研)

「琵琶湖流入河川におけるスジエビの季節的な移動」○澤田謙也（岡山理大・院・理工）、武山智博（岡山理大）

「山口県見島に生息するニホンヒキガエル *Bufo japonicus japonicus* の産卵数および卵サイズ」○徳本正、石丸凌成（山口大・院・創成）、寺本響（山口大・理）、小島渉（山口大・院・創成）

「DNA バーコーディングによる宮島のニホンジカ野生集団の食性解析（予報）」武田祐奈（広島大・理）、ファン=クイン=チ（広島大・院・統合生命）、中原・坪田美保、○坪田博美（広島大・瀬戸内CNセ・宮島）

「中高生に対する生物多様性保全に関する環境教育の実践」○築地孝典（藤クリーン（株）、岡山理科大学附属中高

【口頭発表】（5月 18日）

「120 年ぶりに開花した香川県のハチク林における栄養成長による更新の可能性」高宮遼太郎、河野晴香、篠原拓一朗、○小林剛（香川大・農）

「都市生態系における在来一年草ツユクサの遺伝構造：生育地の歴史性の違いに着目して」山本倫正（岡山大・環境理工）、山口寛登（岡山大・院・環境生命自然）、藤原日向（岡山大・院・環境生命自然）、宮崎祐子（岡山大・院・環境生命自然）、中田泰地（九州大・院・理学）、中濱直之（兵庫県大・兵庫県博）、中田和義（岡山大・院・環境生命自然）、○勝原光希（岡山大・院・環境生命自然）

「ニホンヒキガエルの小型個体群における幼生の成長パターン」○石丸凌成、徳本正（山口大・創成科学研究科）、寺本響（山口大・理）、小島渉（山口大・創成科学研究科）

「二生吸虫の第二中間宿主の特定及び宿主特異性の解明」○白石蒼馬（高知大学）、田畠諒一（琵琶湖博物館）、三浦収（高知大学）

「分子遺伝学的解析手法を用いた琵琶湖固有カワニナ類の二生吸虫類相の解明」○中垣内颯大（高知大・院・農林海洋）、三浦収（高知大・農林海洋）

「イノシシが利用するヌタ場の環境要因の基礎研究」○柳井風花（山口大・院・創成科学）、大森鑑能（山口県立山口博物館・学芸員）、細井栄嗣（山口大・院・創成科学）

「北広島町八幡湿原におけるニホンジカの出現頻度と採食植物」竹田仁実（広島大・総科）、渡津友博（広島大・院・国際協力）、駒田夏生（広島大・院・先進理工）、中林雅（広島大・院・統合生命）、○坂哲朗（広島大・院・先進理工）

【高校生研究発表】（5月 17日）

「廃棄物を利用した発展途上国そのための水質浄化装置」増田智仁、柳川遼大、吉本賢生、中尾力広（愛媛県立宇和島東高等学校）

「湯原ダム直下の水生昆虫相調査(1962 年/2024 年)」川中健生、

新川直亮（岡山県立岡山朝日高等学校）

「シート化」と培地との接触面積がイシクラゲの生育、糸状体長および異質細胞の割合に与える影響に関する研究」田中幸仁、小林優恭（学校法人関西学園関西高等学校）

「乳酸菌の形状と増殖及び乳酸生成の比較」尾野ふたば、中野美咲、西平若葉、木村健治（岡山県立玉島高等学校）

「ニホンイシガメの温度依存性決定タイプと臨界温度」角倉来実、入江洋史（近畿大学附属広島高等学校福山校）

「管理された人工水域におけるカワバタモロコの生息域外保全の検証」國本夕貴、松本真愛、横山卓矢、奥野日陽、川田正明（香川県立高松桜井高等学校）

「火星環境下で微生物は生存可能か？」久間典生、土岐璃幸、小林智美、中川和倫（済美高等学校）

「松山城黒門口登城道 鳥類調査」横山里玖、三枝侑矢、藤本竜平（済美高等学校）

「松山市のため池における水圈生態系と多様性保全に関する研究」菊池裕太、上村芽生、保手浜拓、三上秋、原友樹（愛媛県立松山南高等学校）

「ナゴヤダルマガエルを守るための最適な飼育方法とは」高田暢々華、杉井心珠、黒田聖子（ノートルダム清心学園清心女子高等学校）

「挑む！ヒメ様のなぞ—ヒメギスの縄張りとグルーミング」森岡玲圭（ノートルダム清心学園清心女子高等学校）

「西条市千町地区における訪花性カミキリムシの生態調査」秋庭苅奈、伊藤那奈、今井彩葉、美濃花穂、東睦雄、河野直子（愛媛県立西条高等学校）、浅野悟史（京都大学大学院地球環境学堂）

「児島湾内の海と河川におけるスズキの生態調査および生分解性プラスチックルアーの開発」大月俊弥、藤井彩乃、伏見あかり、岡元将太（創志学園高等学校）

「サンゴガニは攻撃対象を何で判断しているのか 視覚と嗅覚」天野奏太、重松洋、岩崎絢香（愛媛県立長浜高等学校）

「高知市の河川と発電菌」井上昇哉、泉元康、中村健人、中嶋凜音、久保有人（土佐塾高等学校）

「淡水シジミによる水質浄化と生物相変化」宗雪開晟、長尾颯太、重谷斗貴、窪田疏祈、丸尾秀樹、柏木由加子（愛媛県立今治北高等学校）、井上雅裕（愛媛県立今治北高等学校、愛媛大学・理・SHIN-GS）

「家庭でできる簡易飲み水除菌法の開発～途上国貧困層の子どもたちへ～」池田奈津紀、河野晴翔、清水大雅、関本夏実、根本咲菜、野原伶太、清川彩（愛媛県立北宇和高等学校）

【公開シンポジウム】（5月 17日）

『生命が辿った5億年：動物と植物の進化過程の解明をめざして』

16:00～16:05 「はじめに」村上安則（愛媛大学 大学院理工

- 学研究科生物学分野)
- 16:05～16:40 「温故知新の円口類研究：脊椎動物の脳および脳神経の初期進化の理解に向けて」鈴木大地（筑波大学生命環境系生物学域）
- 16:40～17:15 「遺伝子の記憶から植物5億年の進化を探る」 加藤大貴（愛媛大学 大学院理工学研究科生物学分野）
- 17:15～17:50 「現生魚類の生理生態から探る水棲生物による淡水進出の全容」大戸夢木（愛媛大学大学院理工学研究科生物学分野）
- 17:50～18:00 総合討論
- 【総会】(5月18日)
- a. 報告事項
- 1) 役員会構成員の変更について、高知県幹事が鈴木紀之氏から比嘉基紀氏に、地区選出代議員が鈴木紀之氏から三村真紀子氏に、会計幹事が中林雅氏から久野真純氏に変更になった旨の報告があった。
 - 2) 庶務報告 学会誌発行部数や地区会員の動向について報告があった。
 - 3) 地区選出委員からの報告
 - 4) 意見書・要望書の提出について、2024年度は「瀬戸内海（上関）における中国電力の使用済み核燃料中間貯蔵施設建設計画」に関する要望書を中国電力、環境省、山口県、上関町宛に、「（仮称）嶺北香美ウインドファーム事業」に関する要望書を環境省、経済産業省、高知県、香美市、大豊町宛に、それぞれ提出したことを報告した。
 - 5) 地域シンポジウム等補助金の助成状況を報告した。
- b. 審議事項
- 1) 2024年度会計決算が承認された。
 - 2) 2025年度会計予算が承認された。
 - 3) 次期会長選挙の実施方法について承認された。
 - 4) 出版助成の実施方法について承認された。
 - 5) 2026, 2027年度合同支部大会開催地について、それぞれ鳥取（2026年度）および高知（2027年度）が承認された。
 - 6) 第75回日本生態学会全国大会の開催地：広島での開催を検討することが承認された。
- 九州地区会**
- (1) 2024年度地区委員会・総会
- 地区委員会 2024年5月13日（月）オンライン
- 地区総会 2024年5月25日（土）琉球大学
- (2) 地区大会
- 第68回三学会九州支部・地区合同大会
- 会期：2024年5月25日（土）、26日（日）
- 会場：琉球大学千原キャンパス
- 【生態学会員による口頭発表】
- Lorenzo Fellin (Trento University1), Marco Valerio Rossi Stacconi (Edmund Mach Foundation2), Alberto Saddi2, Gianfranco Anfora1, Sergio Angeli (Bolzano University), Giada Bellotti (Laimburg Research Centre3), Silvia Schmidt3 「Study of the overwintering strategies of the figtitid wasp *Ganaspis brasiliensis* G1, larval parasitoid of the spotted-wing drosophila *Drosophila suzukii*」
- 柳澤隆平(農研機構・植物防疫研究部門), 上原祥太郎(九大・院・理),立田晴記(九大・院・理)「基質振動はタバココナジラミの繁殖を抑制するか?」
- 児玉建(九大・シス生), 立田晴記(九大・理)「ツクツクボウシの主鳴音における前半・後半パートの順序がオスの応答に与える影響」
- 宗祥史(鹿児島連大),Ayman K. Elsayed(佐大・農),田渕研・吉村英翔(東北農研),岩泉連(横浜市),内藤明紀(日本野鳥の会),山尾僚(京大・生態研),村山輝記(広島市),小高信彦(森林総研九州),古川晶啓(佐大・農),尾形之善(西之表市),喜久村智子(沖縄農研),徳田誠(佐大・農;鹿児島連大)「ヨキ属植物の蕾を利用するタマバエ類の多様性」
- 矢野文士(鹿児島連大), 古川晶啓(佐大院・農), 尾崎一天(近大院・農), 澤畠拓夫(近大・農), 徳田誠(佐大・農;鹿児島連大)「幼生生殖タマバエの野外生態:九州北部の照葉樹林における事例研究」
- 徳田誠(佐大・農;鹿児島連大), 宗祥史(鹿児島連大), 小高信彦(森林総研九州)「東アジアにおけるスタジイタマバエの遺伝的変異と分布拡大過程の推定」
- 金城幸宏(沖国大・経済), Thomas Bourguignon(OIST), 斎藤星耕(沖国大・経済)「アブラムシ細胞内共生細菌のゲノム縮小進化の過程における突然変異傾向の進化」
- 裏岩美月(琉大・理工), 藤本真悟(琉大・総合技術部), 柿岡諒(琉大・熱生研), 楠見淳子(九大・比較社会文化研究院), 山平寿智(琉大・熱生研)「二次的接触した湖沼性のメダカ属3種における集団動態履歴およびゲノム分化パターン」
- 柳沼嘉偉斗(九大・地社), 田中梢太・北野忠(東海大・教養), 荒谷邦雄(九大・比文)「飼育下におけるリュウキュウヒメミズスマシ(コウチュウ目:ミズスマシ科)の成長過程」
- 丸田裕介(琉球大・院・農), 鶴井香織(琉球大・農), 辻和希(琉球大・農)「沖縄島北部における脊椎動物のロードキル発生状況」
- 武居風香(北大・院理), 棚沢日菜子(北大・院理),高木昌

興(北大・院理)「沖縄島に生息するリュウキュウコノハズクの広告声の個体差が形成される要因について」

【生態学会員によるポスター発表】

- 村上裕実(琉大・院・理工)・小林峻(琉大・理)「イソヒヨドリ *Monticola solitarius* のヒナ分けと餌量の関係」
- Rickdane Gomez・Lucas Yutaka Kimura(琉大・理工院), Takashi Nakamura(琉大・理学)「Community structure and composition of reef fishes in Okinawa Island」
- 吉岡秀陽(琉大院・農), 鶴井香織(琉大・農), 辻和希(琉大・農)「シロオビアゲハのオス・メス擬態遺伝子型率の比較による捕食圧の評価」
- 佐瀬三紗(九大・天草臨海), 新垣誠司(九大・天草臨海)「転石潮間帯におけるカサガイ類のマイクロハビタット利用分析」
- 市川静琉(九大・天草臨海), 新垣誠司(九大・天草臨海)「岩礁海岸の潮間帯動物群集におけるフジツボの生息地提供」
- 松本くるみ(九大・シス生), 古賀隆一(産総研・生物プロセス), 細川貴弘(九大・理)「マツヘリカメムシに感染する細菌 *Rickettsia* の感染状況及び垂直伝播」
- 西嶋武頼(九大・シス生), 鈴木佑弥(徳島県博), 中田兼介(京都女子大), 立田晴記(九大・理)「トゲゴミグモの交尾器破壊と再交尾抑制: 研究の進捗と展望」
- 辻本悟志(沖縄美ら島財団), 亀山統一(琉大農), 辻本文香(沖縄科学技術大学院大学), 梶村恒(名古屋大院生命農)「フクギノコキクイムシの繁殖行動: ドラミングの発見」
- 東哲平(琉大・院・理工), 小林峻(琉大・理)「沖縄島やんばる地域における自然樹洞と巣箱を利用する動物相」
- 藤谷彰子, 高田鍊, 野見亮人, 藤岡慧明(同志社大・生命医科), 牧貴大(鹿児島大・国際島嶼教育研究センター), 手島優風(JAMSTEC), 小林峻(琉大・理), 福井大(東大・農学生命科), 依田憲(名古屋大・環境), 飛龍志津子(同志社大・生命医科)「GPS ロガーを用いたオリイオオコウモリの移動生態に関する基礎的研究 -母親個体の夜間の採餌移動-」
- 比嘉俊(琉大・教育学研究科)「国内における外来生物の教育的啓発の概説」
- 大嶺匡史(南西環境研究所), 宮良工・宮城保大・桃原昌寿・神里敏幸(沖縄環境地域), 久高紘大・徳丸慶太郎(南西環境研究所), 和宇慶剛(沖縄県自然保護課)「沖縄県外来種対策事業(植物対策)の実施状況」

○尾花拓海(九大・天草臨海), 新垣誠司(九大・天草臨海)

「温帯域ブダイ類によるサンゴ摂食行動の評価」

○武山智博(岡山理大・生物地球), 岩見恭子・富田直樹(山階鳥研), 兵藤不二夫(岡山大・環境生命自然科学), 水田拓(山階鳥研), 関伸一(森林総研・関西), 小高信彦(森林総研・九州)「鳥類標本の新たな学術利用方法の検討—羽の安定同位体分析」

○堀江健太, 小澤杏, 藤吉正明(東海大・教養), 亀山慶晃(東京農大・地域環境), 水谷晃, 河野裕美(Island Ecosystem Research)「沖縄の海岸付近に生育するガジュマルの形態特性と遺伝的組成」

○木村ルカ豊(琉大・院理), Rickdane Gomez(琉大・院理), 中村崇(琉大・理)「サウンドスケープ変化から読み解くサンゴ礁生物群集への巨大台風の影響」

○西脇唯也(宮大・農)「「植物体内水分計」は植物が必要とする水の量を知ることができるか?」

(3) 地区例会

第605回 5月25日(土) 沖縄(四学会合同沖縄大会公開シンポジウムとして開催、琉球大学千原キャンパス共通教育棟2号館共2-205教室)

公開シンポジウム 沖縄島の固有鳥類の現在と未来にむけて

関伸一(森林総合研究所関西支所)「ホントウアカヒゲの不思議: 渡り鳥から琉球列島の中で種分化」

小高信彦(森林総合研究所九州支所)「ノグチゲラの不思議: オスの地つきは、夫婦円満の秘訣」

第606回 11月16日(土) 佐賀(佐賀大学農学部1号館1階第3講義室)

栗田桃萌(佐賀大学大学院農学研究科)「限られた資源を利用するベニツチカメムシは雌雄で飛翔戦略が異なる」

藤田大輔(佐賀大学農学部)「イネのトビイロウンカ抵抗性遺伝子とその利用」

徳田 誠(佐賀大学農学部)・矢野文士(鹿児島大学大学院連合農学研究科)「塩生植物マツナ属の生存戦略とシメンソウをめぐる昆虫群集」

第606回 11月17日(日) 宮崎(宮崎大学農学部附属フィールド科学研究センター2F会議室)

右京里那(宮崎大学農学部畜産草地科学科)「生後早期の社会的隔離がデグー *Octodon degus* の行動傾向に及ぼす影響」

満行知花(宮崎国際大学教育学部)「私のこれまでの研究 - 外来タンボポの進化と、さまざまな生物のMiG-seq解

析で見えてきたものー」
第607回 12月7日（土）鹿児島（鹿児島大学理学部220号講義室）

【高校生の研究発表】

鹿児島県立錦江湾高等学校 サイエンス部クモ班：徳永瑛,和田千夏,末次愛梨,山内蓮,宮元叶太,花井龍之介,堀田寛翔,坂口太陽,馬場美咲(顧問:大迫武治)「建物に巣をつくるジョロウグモの1年間の記録」

鹿児島県立錦江湾高等学校 SRシジミ班：東怜矢,西風斗,中養母史也,濱田一馬,山本華帆,大隣花菜,瀬尾日菜子(顧問:小溝克己)「ムラサキツバメを取り巻く生き物たちの相互関係」

池田学園池田高等学校 生物応答班：田口世南,早川葵,鎌田美舞菜(顧問:黒木和樹)「九州のゲンジボタルの明滅周期に関する研究」

【一般講演】

福留光挙（鹿児島大学理学部）「マメ科植物のもつ植物ヘモグロビンの特徴と役割について」

第608回 12月14日（土）福岡（九州大学伊都キャンパス理学部講義棟202室）

古谷将彦（福岡大学理学部地球圈科学科）「液-液相分離によるオーキシン輸送制御」

高須賀圭三（九州大学大学院理学研究院）「クモヒメバチ類のクモに特殊化した数々の適応形質」

第609回 12月14日（土）長崎（長崎大学環境科学部学生実験室A）

○加藤理子1・八木光晴2(1長崎大院・総合、2長崎大・水産)「ライントランセクト法を用いたウミウシの群集構造と多様性比較」

○山口実希1・岡田二郎2(1長崎大院・総生研、2長崎大・環境)「ロボットを用いたチゴガニのウェービング同期の解析」

○大浦ひなた1・松本弥優2・原優梨亜2・大庭伸也1,2(1長崎大院・総合生産、2長崎大・教育)「日本列島のコオイムシにおける体サイズのクライインを考える」

○服部琢磨1・近藤遼登2・天谷貴史3・竹垣毅1(1長崎大院・総合生産、2長崎大・水産、3長崎大・環シナ海セ)「ロウソクギンボ雄はどの感覚で保護卵を認識するか?~保護行動とホルモン動態を指標に~」

○普天間ちおり1・小島涉2・大庭伸也1,3(1長崎大院・総合生産、2山口大・理、3長崎大・教育)「カブトムシの外部形態と体脂肪率の個体群間比較」○浦川慧大

- 1・八木光晴2(1長崎大・水産、2長崎大・水産)
「コップ一杯で資源量推定は可能なのか?環境DNA vs 底引きトロール漁」
- 第610回 12月14日（土）大分（大分大学旦野原キャンパス理工大講義室104号教室）
- 植木和宏(株式会社レックス九州)「大分市街におけるハヤブサの生態について」
- 大分雄城台高校科学部(顧問:安部慶一郎)「大分県大分市七瀬川自然公園周辺におけるコウモリ類の分布の推定」
- 恩田諒(大分大学大学院工学研究科)・永野昌博(大分大学大学院工学研究科)「ニホウサンショウウオとオオイタサンショウウオのMaxentによる生息適地予測と絶滅リスク管理」
- 宮井裕貴(大分大学理工学部)・永野昌博(大分大学理工学部)「オオイタサンショウウオとニホウサンショウウオの種間交雑における行動解析」
- 大倉鉄也(大分生物談話会)・星野和夫(大分生物談話会)・秦香織(大分生物談話会)「大野川水系野津川におけるボウズハゼの捕獲記録(予報)」
- 永井大翔(琉球大学大学院理工学研究科)・今井秀行(琉球大学理学部)「大野川水系における在来スマエビ類と外来種の置き換わり」
- 高野裕樹(大分生物談話会魚類班)「大分川水系で分布を広げる国内外来魚ギギ~2024年速報:七瀬川と馬入川で確認~」
- 安田雅俊(森林総合研究所)・○森澤猛(森林総合研究所)「クリハラリス根絶後の高島」
- 炭本悟朗(NPO法人おおいた生物多様性保全センター)「くじゅう連山の湧水調査」
- 渡辺伸一(日本希少鳥類研究所・麻布大学)「オオミズナギドリ瀬戸内海繁殖集団の保全:高島および周辺繁殖地における採餌海域および繁殖率の比較」
- 明石侑大(大分大学理工学部)・永野昌博(大分大学理工学部)「絶滅危惧種の情報管理と時空間解析に特化した非公知性データベースの開発」
- 利光誠一(大分地質学会)・山田俊治(大分地質学会)・堀田秀俊(大分地質学会)
「大分地質学会と県立自然史博物館構想への夢」
- (4) 地区会報86、87号発行

書評

崎尾均編「ここがすごい！水辺の樹木 生態・防災・保全と再生」(2024) 232pp. 築地書店 ISBN: 978-4-8067-1676-1 定価2,400円+税

本書は、水辺の樹木の生活史や水辺林（溪畔林、河畔林、湿地林など）の保全・再生などについて、幅広く学ぶことのできる好著である。著者は、日本の水辺林研究を牽引し、森林生態学や樹木学などの論文や書籍を数多く執筆されている。さらに、樹木図鑑の発行や屋久島の巨大杉を探すテレビ番組などにも携わるなど、多岐にわたる活動を展開されているので、水辺林研究が専門ではない方々もご存知だろう。

本書は9つの章で構成される。第1章「失われる水辺林」と第2章「水辺林とは何か？」では、水辺林や水辺環境の基本的な特徴や、水辺林が河川生態系に与える影響と人の暮らしにもたらす恩恵、水辺環境の変化や水辺林の喪失などについて紹介されている。第3章「水辺の樹木の多様な生き方」、第4章「代表的な水辺林とそこに生きる樹木」、第5章「なぜ樹木は水辺で共存できるのか？」、第6章「大規模攪乱後の水辺林の更新状況を調べてみたら」では、著者の研究事例に触れながら、シオジやサワグルミ、カツラをはじめとする約20種の水辺の樹木の生存・繁殖戦略といった生態や、多様な樹種が同所的に共存する背景などについて詳しく紹介されている。水辺では、土石流に代表される大規模な攪乱が起きたり、増水で水に浸かったりすることがあり、多くの樹木にとって生育に厳しい立地条件である。しかし、水辺の樹木たちは、特殊な環境に耐え、攪乱を繁殖の好機として巧みに利用している。その生き様には、逞しさとともに微妙なバランスの上に成立している繊細さを感じる。第7章「水辺林への侵入者ハリエンジュ」では、水辺林における代表的な外来種であるハリエンジュについて、その生態、分布が拡大してきた背景と除去の方法などについて紹介されている。最後に、第8章「どのように水辺林を再生し復元するか」と第9章「水辺林をまもる」では、水辺林の保護・保全や再生・修復の方法について、水辺林が見られる具体的な地域を紹介しながら解説・提言されている。

本書の特徴の一つは、扱う内容の幅広さである。そのことは、巻末の索引にさまざまな動物の種名や生物学以外の用語が載っていることからもわかる。分野を問わず、多くの方の興味をひくトピックがあるのではないかと思う。加えて、96枚ものカラー写真（口絵）で紹介される水辺林の景観や水辺の樹木の生態写真も見どころである。水辺の樹木の実生から開花・結実に至るまでのライフステージごとの形態や、海外に分布する日本の水辺の樹木との同属他種の姿など、本書以外では得がたい情報も多い。例えば、実生の写真は、水辺林で樹木の芽生えを見つけた時の種同定の助けになるし、根萌芽で栄養繁殖する

シチリア島（イタリア）のケヤキ属の一品種 (*Zelkova sicula*) の姿は、ケヤキ属のイメージが覆されるほどのインパクトがある。

もう一つの読みどころは、著者の研究人生を導いた7樹種との出会いを紹介するコラム「●●との出会い」である。著者がどのような経緯でその樹種を研究対象とするに至り、どのような研究を実施したかについて、経歴や人との交流にまつわるエピソードを交えて生き生きと紹介されている。コラムの中では、人とのつながりが研究において大事であり、それは自らの積極的な働きかけによって得られたものであると述べられている。長年研究の第一線で活躍されてきた著者の言葉だけに説得力がある。

水辺林は人間の活動場所と重なることから、人工構造物の設置などで既に多くが破壊され、残されている植生も種組成が変化している。加えて、外来樹種の侵入やニホンジカの採食による植生破壊の影響が近年増大していることから、その保護・保全・再生の重要性とその対策の緊急性は高まっている。写真や図を多用し、平易な文章で書かれている本書は、水辺林のハンドブックとして初学者の方が手に取る一冊としておすすめできる。また、水辺の樹木や水辺林についての総説的な内容に加えて、最新の知見も紹介されているので、学生や研究者の方にも読みごたえがあると思う。なお、一般書の性質上、参考文献の紹介については最小限であるので、より深く学びたいという方は、本書の著者が執筆している「水辺の樹木誌」(2017年発行、東京大学出版会)をあわせて読まれ、巻末の引用文献を参考にして関連する論文にあたると良いであろう。

水辺の樹木は、それ自体が分類学上興味深いものが多い（例えば東アジア固有のカツラ科、フサザクラ科）だけでなく、水辺林を形作り多様な動植物のよりどころになっている。また、治水や漁業資源、美しい水辺景観の創出といった多面的ななかたちで、私たちに恩恵を与えてくれる。主に論文や専門書を通して研究成果を発表してきた著者が、このたび一般書である本書を出版したのは、水辺の樹木・水辺林の保全や再生がすべての人に関わる重要なことであり、著者と異なる分野の方や、研究と関わりのない方にもそれを知ってもらいたいという思いがあるからだろう。本書をきっかけに、多くの「すごい！」に満ちた水辺林に興味を持つ人が増えれば幸いである。

（倉敷市立自然史博物館 鐵 慎太朗）

山浦悠一・中山聰編著「実証実験・保持林業—広葉樹を残して生き物を守る」(2025) 240pp. 築地書店 ISBN978-4-8067-1686-0 定価2,500円+税

樹木の伐採という強い人為攪乱を伴う森林施業のなかで、木材生産と生物多様性保全という相反しやすい目標を、同一林分内でいかに両立させうるかを問う一冊である。保持林業（生物

にとって必要な樹木を保持して残す) という、伐採時に意図的に一部の樹木を残す手法) は理念として語られやすいが、現場では作業性・安全性・収益性・合意形成など、現実の制約が先に立つ。本書の重要性は、その制約を正面から引き受け、著者らが 10 年規模で積み上げてきた努力と実践を、読者が参照可能な“知”として編み直している点にある。

本書の核となるのは、北海道の道有林における保持林業の大規模実証実験である。2011 年から議論と計画を重ねて進められたこの取り組みの成果を、本書は各章で丁寧に紹介する。針葉樹人工林の伐採時に一部の広葉樹を残すことで、生物多様性を保全しつつ木材を生産できる可能性が示されたことが、本書全体の背骨になっている。さらに本書は、2018 年に刊行された保持林業の入門的整理の“後継”として位置づけられ、実証に根差したアップデートを提示する。

構成は明快である。序論として「なぜ今、保持林業か?」を掲げ(第 1 章)、第 2 部では大規模実験の成果を、木材生産性(第 2 章)にとどめず、保持木の生残、下層植生、外生菌根菌、地表性甲虫、コウモリ、鳥類といった多様な生物群の応答として示す(第 3~8 章)。加えて、孤立木で営巣するクマゲラや、伐採によって生息地が形成される遷移初期種としてのヨタカを扱うコラムが挟まれ、保持林業の“見えにくい効き方”を想像しやすい。

本書がさらに一步踏み込むのは、第 3 部・第 4 部である。10 年間の成果のとりまとめと実際の林業現場への実装可能性を分かりやすく要約しつつ(第 9 章)、実際に作業を担った事業体の声(第 10 章)や、道有林で実践した担当者の視点(第 11 章)も知ることができる。そして、北海道の社有林や高知県のスギ・ヒノキ人工林での実践(第 12~13 章)へと視野を広げることで、保持林業を“研究成果の紹介”で閉じず、現場へ移植する際の論点を読者に渡している。ここに、著者らの 10 年間の努力が「データ」だけでなく「実装の知恵」として結実しているのを見る。

評者がとりわけ評価したいのは、本書が「両立」を安易な調停として描かず、両立の条件を設計問題として提示している点である。保持林業は、単に“残す”か“残さない”かではない。何を、どれだけ、どのように残すか—その選択が微環境や景観構造を変え、生物群の反応の仕方を変え、ひいては施業の継続可能性(現場で回るかどうか)に跳ね返ってくる。本書は、そうした因果の鎖を、複数の生物群と複数の時間軸で照らし、両立の議論を具体化する。

もちろん、実証が厚いからこそ次の問い合わせも立ち上がる。地域や林分条件が異なる場合にどこまで一般化できるか、保持設計の違いが長期的な森林動態や更新過程にどう効くか、またコストや制度(認証・補助・調達、さらには企業の自然関連開示等)とどう接続しうるかである。第 14 章が課題と展望を掲げるよ

うに、本書は結論を閉じるよりも、保持林業を社会実装へ進めるための宿題を読者に残している。

木材生産と生物多様性保全の両立は、願望だけでは前に進まない。本書は、その困難を直視しつつ、10 年の努力と実践で、両立を“語り”から“設計と運用”へ引き戻した。現場関係者、行政担当者、研究者、そして森林に関心をもつ幅広い読者にとって、議論の共通言語と足場を与える一冊である。

この実験はさらに 40 年間続くこと、今後の成果に期待したい。最後に、情熱と熱意をもってこの実験と実証うい具現化し実践してきた編者を中心とする研究チームに敬意を表したい。

(東京大学先端科学技術研究センター 森章)

日本動物行動学会編集 日本動物心理学会編集協力「動物の行動と心の事典」(2025) 384pp. 朝倉書店 ISBN : 978-4-254-17205-8 定価 14,000 円+税

今の日本でのネコの飼育数はおよそ 900 万頭、イヌの飼育数はおよそ 680 万頭だそうだ。ネコやイヌを飼う動機はさまざまだろうが、多くの人々は動物好きであるに違いない。しかし、野生の動物は、飼い猫や飼い犬とは違う。ネコやイヌを飼って可愛がっている人々も、野生动物となると、もしかして嫌いかもしれないし、想像がつかないのではないか。

野生动物の行動と生態の観察は実に困難だが、その原因の一つは、野生动物が生息する地域には、文明の恩恵があまり行き届いていないので、研究者がそこで暮らすこと自体が大変だということだ。私自身、野生チンパンジーの研究でアフリカに 2 年ほど滞在したが、当時のその場所は、電気なし、ガスなし、水道なしの生活だった。

もう一つの困難は、彼らの感覚が私たち人間のそれとは非常に異なるので、観察や測定が大変に難しい、ということにある。私たちには見えない、聞こえない相手をどのように科学的に記述するか、それは、こちらの想像力との勝負である。

それやこれやの困難にもかかわらず、動物の行動と生態を知りたいと思う研究者はたくさん存在する。また、動物がどのように世界を感知し、彼らのからだがどのようなメカニズムで働いているのかを研究したいと思う人々も、たくさんいる。

従来、前者の研究者は動物行動学会に、後者の研究者は動物心理学会に、それぞれ所属して研究してきた。この 2 つの学会は、歴史的いきがかりのせいで、あまり一緒になることはなかった。最近は、合同大会を持つこともあり、相互に関係を深めている。その一つの現れが、本書であろう。

本書は、日本動物行動学会の設立 40 周年を機に計画されたそうだ。この学会を設立当時から知り、会長も務めたことのある私としては、非常に感慨深い。私の夫は心理学の出身で、日本動物心理学会との関係が深かった。そして、2 人してアフ

リカの奥地で研究をしたので、私にとっては、この2つの分野が一緒になることは、いわば当然と思える。

本書は、始めの方で、行動と進化の関係、動物の「意思決定」とは何かなど、いくつかの理論的な説明がまとめられている。が、そのあとは、「ヤドカリの着ぐるみを纏うトラフコウイカ」、「ミナミハンドウイルカの斑点の意味を探る」、「死んだふりの美学」といように、さまざまなトピックが次々と続く。

あとの方の、実に多岐にわたるトピックが登場する部分だけを読むと、一見、何のまつりも構造もない書物であるかのように見えるかもしれない。しかし、一方で、それぞれの話題は大変におもしろく、ついつい引き込まれてしまうのだ。

そうして、読み終わると、確かに動物の行動と心理について、かなり多くの事柄が理解できたように感じる。おもしろいと思って読み進むうちに、かなりのこと学んでいる。それは、書物として大事なことだと思うのだ。

動物と言っても、脊椎動物も無脊椎動物もあり、それぞれの種ごとに感覚世界も行動の仕方も異なる。私は、野生チンパンジーの観察で博士論文は書いたが、その後、有蹄類も鳥類も研究したし、タニシという貝類を調べていたこともある（目下の興味はイカ、タコなどの軟体動物にある）。

しかし、そんな背景を持つ人ばかりではないので、たとえ研究者であっても、さまざまな動物がそれぞれこんなに異なる世界を持っていると知っている人は少ないだろう。その意味で、「雑多な寄せ集めの記述」とも言えるような書物は、とても有意義なのだ。

最近の人々は、科学・技術がすみずみにまで浸透した社会で暮らしている。その結果、毎日の生活が技術的に滞りなく運ばれていくことが最大の目的となってしまった。こんな世界では、ほんの少しの不具合も見逃されずに糾弾される。

そして、生活が清潔であることが最上位の優先事項になってしまったのではないか。だから、地球環境を守らなくてはいけない、野生生物を保護せねばならないということは、以前に比べて、理念的には誰もが十分理解しているにもかかわらず、誰もが、自分自身の部屋の中、自分の毎日の暮らしの中には、虫一匹入ってきては困る、と思っているのではないか。

機械文明優先の感覚が蔓延していくとどうなるか？ 最近のクマ問題を見ても明らかなように、結局は、地球環境が守られることはなく、野生生物は絶滅し、完璧なまでに改変された地球表面に、人間だけが住むようになる結末しかないような気がするのである。

しかしそんなことは阻止したいし、何百万と存在する他の動物種について、より多くの人々に、もっとよく知ってもらいたい。相手を知るのは重要なことだ。相手を知らなければ、絶滅に追いやられても気にしないが、少しでも相手を知れば、思いを寄せるようになる。そして、他の動物たちがこの地球上で

私たちと共存し、私たち人間が彼らの生活を垣間見ることのできる日々が、ずっと存続して欲しいと思うのである。

（日本芸術文化振興会理事長 長谷川眞理子）

Center for Ecological Research NEWS



京都大学 生態学研究センター

Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒 520-2113 滋賀県大津市平野 2 丁目 509-3
Tel : (077) 549-8200 (代表), Fax : (077) 549-8201
センター長 木庭 啓介

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page : <https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

2026年 1月号 京都大学生態学研究センターニュースのご紹介

- センター員の紹介
- 2025年度共同利用・共同研究事業の活動報告
- 研究ハイライト
- その他のお知らせ



「研究ハイライト」では、
プレスリリースされ、京都大学ホームページ等に掲載された研究成果を
紹介しています。

センターニュース メール配信登録のお願い

生態学研究センターニュースは
バックナンバーを含め、センター
ホームページの以下の URL からご
覧いただけます。

<https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/newsletter.html#ct3>

発行のお知らせメール配信の登
録、配信先の変更、配信停止等を
ご希望の場合は、インターネット
上の以下のフォームより必要事項
のご入力をどうぞお願いいたします。

<https://ws.formzu.net/fgen/S75832635/>



- ❶ 多様な魚の遡上が川の生態系を支えている
回遊魚の「おしちこ」は川の生物の大切な栄養源 倉澤 央 (NPO 法人 Bio クラブ)・研究員
<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2024-10-28-0>
- ❷ テン・タヌキ・キツネの森林生態系における異なる機能を解明
山尾僚 (京都大学生態学研究センター・教授)
<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2025-09-05>
- ❸ 冬に遺伝子発現を活性化させるゲノム領域を発見
清水 華子(京都大学生態学研究センター・特定研究員)
<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2025-06-17>
- ❹ 海洋の窒素循環を解き明かすミッシングピース
～世界初：海洋性アナモックス細菌の酸素同位体分別を決定～ 小林香苗 (海洋研究開発機構)
<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2025-06-20>
- ❺ 植物の時計は冬に止まる：野外トランスクリプトームから実態に迫る
村中智明(名古屋大学大学院生命農学研究科・植物統合生理学・助教)
<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2025-09-02-1>
- ❻ ヤマメは同じ川でも様々な生き方を選択—川ごとの多様性が流域全体の生き
方の多様性を支える— 志田岳弥 (研究当時：京都大学大学院理学研究科・修士課程)
<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2025-10-23>

2026年度共同研究bの申請について

毎年度、生態学の基礎研究の推進と生態学関連の共同研究の推進を目的として、共同研究と研究集会・ワークショップを公募しております。

共同研究b (随時募集、予算措置なし)の申請は、Google フォームにてお願いします。

申請方法の詳細はセンターホームページの以下の URL をご確認ください。

<https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/contents.html>

問い合わせ先

京都大学生態学研究センター 共同利用・共同研究拠点担当
電子メール：kyodo-riyo@ecology.kyoto-u.ac.jp
電話：077-549-8200

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。

新年度の会費は9~12月に請求します。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。

退会する際は、前年12月末までに退会届を会員業務窓口まで提出してください。

会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

会費の区分と個人会員の権利・会費

会員種別	基本会費*	大会発表	選挙・被選挙権 (役員・代議員)
正会員（一般）	9500円	○	○
正会員（学生）	4500円	○	○
賛助会員	20000円	×	×

*生態学会では収入の少ない一般会員のために、学会費・大会参加費を学生会員と同額にする措置を実施しています。詳細は[ウェブサイト](#)をご覧ください。

【論文投稿の権利】

- ・日本生態学会誌 正会員のみ有
- ・保全生態学研究 投稿権利は会員に限定されません
- ・Ecological Research 投稿権利は会員に限定されません

【冊子配布を希望する会誌の追加費用】

- ・日本生態学会誌 2,000円
- ・保全生態学研究 2,000円

【非会員に向けた学会誌（冊子体）定期購読料】

- ・日本生態学会誌 5,000円
- ・保全生態学研究 5,000円

問合せ先：一般社団法人日本生態学会 会員業務窓口

〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター

E-mail: esj-post@as.bunkan.co.jp

Tel: 03-6824-9381 Fax: 03-5227-8631